

回想

中学生のころに覚えた陶淵明の「田園の居に帰る」の詩の始めの部分は「若きより俗に適うの韻無く、性 本と丘山を愛す。誤って塵網の中に落ち一たび去って十三年。羈鳥は旧林を恋い、池魚は故園を思う」という。帰ってもよい田園をもつてもいらないのにぼくは、勤めが辛い日にはこの詩を口にしていたようだ。そのうち、「一たび去って十三年」の「十三年」が「三十年」となっている本もあると知って、「一たび去って三十年」が口癖だった。

一九三二年に岐阜県の寒村に生まれたぼくは、長良川上流の小さな町にある高校を出た。そこには勤め場所もなく、早稲田への入学金を持ち、働き場所を求めてぼくは東京へ出た。経済学部の夜学に籍を置いたが、図書館で西鶴を読むのと、学生運動と、きれぎれのアルバイトで五年ほどが過ぎた。一

青木茂

九五一年、上京早々に東博でマチス展を見てこの世界の一端にふれた。その夏の末に高島屋でピカソ展を見て衝撃をうけ、まだ焼跡の残る日本橋の裏町を嘔吐しながら歩いたこともあった。

その頃は青雲の志もあったから、しばらくは陶淵明も忘れていたのであろう。卒業して東京芸術大学の図書館へ勤めて美術図書を読み展覧会をみることを覚え、同じ大学の芸術資料館へ移って美術資料の整理・研究を十年あまりすることになった。四十歳になって迷いはしたが神奈川県立近代美術館へ移籍した。ここでの仕事は辛くもあったが充実していた。展覧会の切れ目に、ふと空白の日、田園で百姓になりたいと思うようになったのはこのころであつたらう。

美術館の激務に疲れ、ありがたい声を掛けられ跡見へ移つ



たのが一九八三年七月だったから、もう十三年あまりになる。

近代日本美術史の研究と教育という、全国の大衆でも珍しい職

場を得て、この期間、ぼくは幸せでもあり責任も感じてきた。ぼくが明治期日本美術の調査を始めたころは、美術史学界ではまだそれに理解も同情も示してくれる人はいなかった。その後、各地に県立美術館ができて、日本近代美術の研究がすすめられるようになり始めたころ、跡見は浅学のぼくを呼んでくれた。

跡見には親切で寛容な先輩・同僚と素直な学生がいて、五十歳まで教職歴のないぼくはほんとうに助かった。ずっと助けられてきた。暇をみてすこしばかりの編著書も公刊できた。東洋、特に中国の石窟寺院の大体も見ることができたし、明治美術学会という組織も作ることができた。

楽しい日々であったが、還暦を迎えた頃からぼくはにわか

一冊を取集するだけになっていた。学生の会話の内容が不可解なものになっていった。学生の前ではつとめて笑顔を作ったが腰からふくらはぎに刺すような痛みが走るようになった。研究者としてはともかく、最近の学生にとって教育者としてのぼくは落第生だということも痛いようにわかってきた。ぼくは辞めることにした。

跡見の教師としては途中で辞めても、できたら卒業生として付き合ってほしい、うれしさを分ちあえる研究仲間としても――。

業績表の図書は、ぼくが跡見に在籍中、個人の名で刊行したものである。共編著・雑誌論文などは煩雑でもあるし記録もしていないので省略した。このうち『明治洋画史料 記録篇』によってぼくは芸術選奨文部大臣賞というのを貰った。

そのうちの一篇『油絵道志留辺』は明治十六年の筆写本を活字にしたものであるが、原稿を起してくれたのは当時跡見の四年生五人であった。註に名前は記してある。下書きを持ち寄って騒ぎながら原稿ができ、校正した日々が思い出される。

余談にわたるが、去年の暮からこの正月にかけてぼくたちは、中国山西省南部の農村へ衰亡しようとしている民間木版「年画」を尋ねて十日間の旅をした。同行十七名のうち跡見

の卒業生が九名だった。時間やお金や急な風邪熱やらで行けない仲間も多かった。

こんな思い出や仲間たちがぼくの宝物である。

ぼくには帰るべき園田はないが、小さな山小屋がある。とうとう出来なかったが大きな研究テーマがある。宝物を懐に、山小屋で少しずつ研究を深めてゆきたいと思う。

略歴

昭和七年八月三十日 岐阜県に生まれる

昭和三十一年三月 早稲田大学卒業

同年四月 東京芸術大学図書館に勤務 同大学芸術資料館附

文部教官助手を経て

昭和四十七年十二月 神奈川県立近代美術館に転勤 同館専

門研究員を経て

昭和五十八年七月 跡見学園女子大学に転勤

平成九年三月 同大学を辞職

ほかに東京都美術館運営審議員、町田市立国際版画美術館長、明治美術学会理事などを委任されている。

業績

『高橋由一油絵史料』昭和五十九年三月 中央公論美術出版
『明治洋画史料 懐想篇』昭和六十年九月 中央公論美術出版

『明治洋画史料 記録篇』昭和六十一年十二月 中央公論美術出版

『油絵初学』昭和六十二年九月 筑摩書房

『明治日本画史料』平成三年五月 中央公論美術出版

『美術の図書 旧刊案内』平成七年十月 三好企画

『自然をうつす』平成八年九月 岩波書店